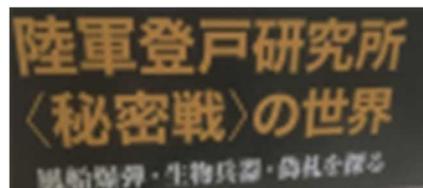


第百六十六話 総力戦下の技術と非人道性

風船爆弾(第八十二話参照)等を調べている際に、「登戸研究所」が頻出し、登戸研究所が気に入り、調べたくとも適当な資料がなかった。偶々、市の図書館で「陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界」(山田朗編 明治大学出版会)なる書籍を見つけた。該本に依拠しつつ、登戸研究所について、その概要を記したい。



1 大東亜戦争時の陸軍の研究体制

陸軍兵器行政本部隷下に、10個の技術研究所が置かれていた。概要下表

研究所名	所在地	研究分野	研究所名	所在地	研究分野
第一	小金井	鉄砲・弾薬・馬具	第二	小平	観測・指揮連絡兵器
第三	小金井	器材・爆破用火薬具	第四	相模原	戦車・自動車
第五	小平	通信兵器	第六	百人町	化学兵器
第七	百人町	物理的基礎研究	第八	小金井	兵器資料
第九	登戸	秘密戦兵器・資材	第十	姫路	海軍資材

第九陸軍技術研究所がその研究分野から特異な組織であったことが窺える。

2 登戸研究所の沿革等

WW I 終結後の1919(T8)年陸軍科学研究所が設置され、登戸には秘密戦資材研究室、研究所実験場を経て、1939(S14)年に「登戸出張所」が設置された。1942(S16)年に「第九陸軍研究所」となった。戦争末期には長野県内に移転した。

研究所は、敷地面積11万坪で、現在の明治大学生野キャンパスを含み、その倍以上の面積であった。最盛期、建物約100棟、所員約1000名であった。1科から4科があり、科長は大佐である。各科の研究項目等は次の通りである。

第1科：風船爆弾、宣伝用自動車、特殊無線機、怪力電波、殺人光線、人口雷等

第2科：科学的秘密通信法、毒物合成・犬まよい剤、毒物謀略兵器、

対動物謀略兵器(家畜用細菌兵器)、耐水・耐風マツチ、諜者用カメラ、
対植物謀略兵器(穀物用細菌兵器)等

第3科：贋札(偽札)の製造 第4科：略

実用化、実戦使用された「風船爆弾」や「国民政府発行紙幣(法幣)」等はあるが、残念ながらと云うべきか、政府が期待したような戦局を大転回させる兵器誕生には至らなかった。これらの研究内容を米軍は夙に承知しており、日本占領早々に接收を期したが、重要書類や関連資機材は破却されていた。後ほど司法取引をして関係者からの聞き取り調査をした。その成果が爾後の米軍の戦争で示された？

3 トピックス等

- ①怪力光線：強力な超音波を照射して物体や人体を殺傷する兵器、実用化に至らず
- ②超短波レーダー：超短波を使用したレーダー、米軍は短波使用
- ③熱線利用射撃管制装置：標的が発する赤外線等を感知して射撃
- ④有線操縦兵器：小型戦車等を有線操縦してトーチカ等を破壊
- ⑤007が装備しているような各種装置 秘密インキ、秘密カメラ、超縮写器材等
- ⑥様々な動物実験(動物慰霊碑あり)、他の研究機関・大学・企業ネットワーク構築
- ⑦大量毒物殺人事件である帝銀事件(1948/1/26)で使用された毒物は登戸研究所で製造された青酸ニトリルが使用されたとの説もある。

非人道的な兵器の研究開発を非難するのは容易だが、総力戦下での技術の役割は如にあるべきかを問うべし。先制使用はせずとも、防衛上は万般に研究を行い対応を準備！

(第百六十六話 了)